

# アパルトヘイトと南アフリカの 「見えざる国教」

Apartheid and "Civil Religion" in South Africa

森 孝 一

Koichi Mori

## キーワード

南アフリカ、「見えざる国教」、市民宗教、オランダ改革派教会、アフリカーナー、ポール・クルーガー、アブラハム・カイパー、アフリカーナー兄弟同盟、グレート・トレック、キリスト教文明

## KEY WORDS

South Africa, civil religion, Dutch Reformed Church, Afrikaner, Paul Kruger, Abraham Kuyper, Afrikaner Broderband, Great Trek, Christian civilization

## 要旨

本論文は、南アフリカのアパルトヘイトを正当化し、そのための宗教的根拠を与えたオランダ改革派教会と南アフリカの「見えざる国教」についての歴史神学的分析である。

本論文は南アフリカの「見えざる国教」の成立と歴史を分析することにより、その特殊性を明らかにする。南アフリカの「見えざる国教」の特殊性は、イギリス系南アフリカ人、オランダ系南アフリカ人(アフリカーナー)、黒人という「三極構造」のなかで、成立・発展してきたところにある。南アフリカの「見えざる国教」は、政治的・経済的支配権を握る、イギリスおよびイギリス系南アフリカ人に対する、アフリカーナーのアイデンティティを支える宗教的意味体系として、ボーア戦争時代に成立した。しかし、同時に、少数者である白人の既得権を黒人に対して守るという点においては、ヨーロッパ・キリスト教文明を正当化するものとして機能したのであった。

## SUMMARY

This article is an historical study on the Dutch Reformed Church in South Africa and South African civil religion, which has justified Apartheid. The peculiarity of South African civil religion has been made by “tripolarity” of Afrikaners (Afrikaans-speaking Whites), English-speaking Whites, and Blacks. South African civil religion has functioned as the system of values and meanings for Afrikaners against English-speaking Whites, but at the same time, as the religion that has justified the White civilization against Blacks.

## 目次

### はじめに

#### 第1章 アパルトヘイトとオランダ改革派教会

1. 「分離したうえでの発展」
2. 聖書によるアパルトヘイトの正当化

#### 第2章 南アフリカの「見えざる国教」

1. 南アフリカの「見えざる国教」の特殊性
2. 南アフリカの歴史の概観
3. ポール・クルーガー
4. アブラハム・カイパー
5. ブルーダーバント（アフリカーナー兄弟同盟）
6. オックス・トレック（牛車の行進）

#### 第3章 二重のアイデンティティ -- 「アフリカーナーの文化」か「白人の文明」か おわりに

### はじめに

アパルトヘイトを乗り越えて、多民族共存の国家建設をめざす南アフリカ共和国は、1995年、長い議論ののちに、これまでの国歌「南アフリカの叫び」(Die Stem van Suid Afrika)と、アパルトヘイト反対闘争のなかから生まれてきた讚美歌「主よ、アフリカに祝福を」(Nkosi sikelel' iAfrika)をつないで、新しい国歌とすることを決定した。「南アフリカの叫び」の歌詞を抜粋して以下に紹介する。

- 4 主の力、全能、信頼のなかに、われらの父たちは昔、築いた。主よ。彼らを、彼ら

の子らを、守り愛し保つため強く鍛えよ - 父たちが未だ生まれていないわれらの子らのため、われらに与えた遺産。主の僕らは、全世界の自由を求める。主よ、われらの父たちがつつましくも信じたように、主をさらに信じるべくわれらを教え給え。主のやり方で主の意思を実現するため、われらの大地を守り、われらの民族を導きたまえ。<sup>1</sup>

一方、「黒人」<sup>2</sup> たちに歌い継がれてきた国歌「主よ、アフリカに祝福を」は以下のとおりである。

- 1 神よ、アフリカに祝福を  
アフリカが力強く立ち上がれますように  
われらの祈りを聞き われらを祝福したまえ  
聖霊よ舞い降りたまえ  
聖霊よ舞い降りたまえ
- 2 われらの指導者に祝福を  
かられが常に創造主を忘れず  
恐れ 敬い  
主のご加護を得られますように  
人々に祝福を  
若者に祝福を  
かれらが辛抱強くこの地を前へ進めていけますように  
神のご加護を得られますように<sup>3</sup>

この二つの国歌から分かるように、アパルトヘイトを支持してきた白人たちにとっても、またアパルトヘイトを廃止するために闘い続けてきた黒人たちにとっても、彼らの心の支えとなったのはキリスト教信仰であった。

ちなみに、1996年の国勢調査によれば、南アフリカ共和国の人口構成は、黒人76.7%、白人10.9%、カラード8.9%、インド系2.6%、その他0.9%である。

1991年に行われた宗教人口調査（サンプル数26,288件）によれば、キリスト教徒の割合は、全体で94.5%である。人種別に見てみると、黒人の97.7%、白人の97.4%、カラードの92.3%、アジア系の18.2%がキリスト教徒である。<sup>4</sup>

日本における南アフリカのキリスト教についての情報は、きわめて限られている。ノーベル平和賞受賞者のエドモンド・ツツ（Edmond Tutu）大主教をはじめとして、アパルトヘイト撤廃運動に南アフリカのキリスト教が重要な働きをしてきたことは、ある程度紹介されてきた。しかし、アパルトヘイトを実施し、黒人を抑圧してき

た南アフリカの白人のキリスト教についての研究は、ほとんど行われていない。<sup>5</sup>

## 第1章 アパルトヘイトとオランダ改革派教会

### 1. 「分離したうえでの発展」

1948年の選挙において国民党が勝利をおさめ、アフリカーナー（オランダ系南アフリカ人）主導の政府が誕生した。勝利の要因は、国民党が巧みに、白人の持つ既得権を黒人が奪回することへの恐怖心を煽り、アフリカーナーだけでなく、イギリス系南アフリカ人の支持を得ることができたからであったと言われている。

国民党政権の誕生直後から、さまざまな種類のいわゆる「アパルトヘイト法」が作られていった。オランダ改革派教会は自らが1997年に出版した『アパルトヘイトとの共なる旅 オランダ改革派教会の物語 1960 - 1994年・証言と告白』において、「アパルトヘイトはオランダ改革派教会の教会政策（church policy）であったことは議論の余地のない」事実であり、「1948年以来、オランダ改革派教会は何度もアパルトヘイト政策を実施するように政府に迫り、オランダ改革派教会の承認のもとに、多くのアパルトヘイト法が制定された」と証言している。そのなかには、白人居住地域にある教会に、非白人が入入りすることを禁止した、「教会条例」(church clause) と呼ばれる「先住民法改正条項」(Native Law Amendment Act、1957年)が含まれていた。<sup>6</sup>

オランダ改革派教会の「罪の告白」ともいうべき『アパルトヘイトとの共なる旅』は、ほぼ全面的にアパルトヘイトを支持してきたオランダ改革派教会の過ちを告白している。しかし、アパルトヘイトを採用しようとした意図については、すべてがネガティブなものではなかったと述べている。

アパルトヘイトあるいは「分離したうえでの発展」を聖書的に正当化しようとし、複雑な状況を現実的に解決するための方法であると考えた人びとのなかには、良心的な意図が含まれていた。<sup>7</sup>

異なった民族に対して、異なった言語と異なった文化状況のもとに、神の言葉が伝達されることは悪ではない。<sup>8</sup>

黒人と白人を分離するという政策は、最初に南アフリカに入植したオランダの政策の中に、すでに存在していた。オランダ当局は1685年、白人と黒人の結婚を禁止し

た。1795年に始まった大英帝国による南アフリカ支配の時代においても、黒人と白人を分離するという政策はそのまま引き継がれた。黒人が外出する時に、「パス」(身分証明書)を所持しなければならないという「パス法」は、すでにイギリス支配の時代から存在していた。<sup>9</sup> その意味で、1948年の国民党政府の成立とアパルトヘイトの採用は、「19世紀のイギリスによる人種政策を引き継いだもの」ということができるだろう。<sup>10</sup>

オランダ改革派教会と国民党がアパルトヘイトを正当化するために用いたのは、「分離されたうえでの発展」と呼ばれる論理であった。外国からの批判に対して、『ハンサート』紙のコラムはつぎのように述べている。

過去数百年にわたって、ズールー(Zulu)はズールーであることを、コーサ(Xhosa)はコーサであることを、ヴェンダ(Venda)はヴェンダであることを誇ってきた。過去300年の歴史から私たちが学ぶことは、黒人も白人も、それぞれの民族集団は分離された個々の発展という基礎の上で、最大限の完成と幸福と相互関係を追求してきたということである。<sup>11</sup>

オランダ改革派教会は1950年に、「分離したうえでの発展」について、これはアフリカーナーに与えられた神からの使命であると述べている。

われわれの教会は、これ(アパルトヘイト)を有色人種の人びとが不利になるために実施したことはない。反対に、それは彼らのための戦いであり、彼らの利益のために最大限に仕えようとする試みである。...白人が持っている保護者としての義務は権利ではなく、崇高な召命である。<sup>12</sup>

もちろん、その後の歴史はこのような「崇高な召命」が実現しなかったことを、明らかに物語っている。1972年の調査によると、白人男性の平均寿命が65歳であったのに対して、黒人男性の平均寿命は36歳であった。「分離したうえでの発展」がいかにかに失敗していたかを、これほど明白に語る事実もないであろう。

## 2. 聖書によるアパルトヘイトの正当化

オランダ改革派教会は、アパルトヘイトや「分離したうえでの発展」を正当化するための根拠を聖書に求めた。聖書によるアパルトヘイトの正当化が、最初に述べられた公式文書は、1943年のオランダ改革派教会総会のものであった。当時高まりつつあった人種間の平等についての主張に対して、聖書に基づき、神は諸国家を、それぞれの言語、歴史、聖書と教会を備えたものとして実現されたと主張した。

その根拠となる聖書の箇所は、創世記11章の「バベルの塔」についての記述や、使

徒言行録2章の「ペンテコステ（聖霊降臨）」についての記述であった。

南アフリカのオランダ改革派教会は、「バベルの塔」と「ペンテコステ」の間にある神学的対応関係などには関心を示さず、この二つの聖書の箇所を、人種や民族の差異を神は容認されているということの根拠として用いようとした。

さらにオランダ改革派教会は、国民党が政権をとる前年の1947年に、聖書と南アフリカの歴史状況を結びつける最初の総合的な試みを、レポートのかたちで総会に提出した。

- 1．聖書は人類の一致について教えている。
- 2．人類を区別することは神によって意識的に行われた業である。
- 3．主は個々の民族がその区別を維持することを望まれた。
- 4．アパルトヘイトは人びとの生活のあらゆる側面に拡大された。すなわち、国家的、社会的、宗教的側面に。
- 5．アパルトヘイトの原則を尊重することに、神は祝福を与えられる。
- 6．キリストにおけるより高次の霊的一致は、いつの日にか実現する。
- 7．力ある者は弱者に対して、神から託された使命を持っている。<sup>13</sup>

聖書は「人類の一致」を主張しているが、それは「終末」において実現するのであり、それまでの期間においては、民族による区別は神の意図するところであると考えたのである。

人種の分離を意図したという点で、南アフリカにおけるアパルトヘイトと、アメリカ合衆国の南北戦争における南部の奴隷制は類似しており、それを正当化するのに、キリスト教と聖書を根拠として用いたという点で、両者は酷似している。

南アフリカのアパルトヘイトの場合も、南北戦争における南部の奴隷制の場合も、聖書やキリスト教神学だけでなく、あらゆる学問を総動員して、アパルトヘイトと奴隷制の正当化に努めた。とくに、アパルトヘイトも奴隷制も人種に関する事象であったので、人類学による正当化が図られたが、これについての議論は別稿に譲ることにする。<sup>14</sup> 南北戦争当時の南部における聖書による奴隷制の正当化と、南アフリカのアパルトヘイトに対する聖書による正当化の議論は、ほぼ完全に一致しているので、ここでは、南北戦争時の南部の例を見てみよう。

聖書による南部の奴隷制擁護の代表的な例は、ソーントン・スティングフェロー (Thornton Stिंगfellow, 1788 - 1869年) によるものである。彼の論文「奴隷制についての聖書による検証」は、1860年に編纂された『綿が王である - 奴隷制擁護論集』に含まれている。<sup>15</sup>

スティングフェローはヴァージニアの大地主の息子として生まれた。彼は1841年にバプテスト教会の牧師となり、節酒運動や日曜学校運動などの社会改革事業を行った。彼にとって奴隷制擁護は、これらの社会変革運動の一環であった。すなわち、彼は奴隷制が黒人にとって最良のものであると考えたのである。

この論文でスティングフェローが意図したことは、聖書の中に奴隷制擁護の根拠を求めることであった。スティングフェローは聖書が奴隷制について触れている最古の箇所は、創世記9章のノアの物語であると言う。「物語」という用語は、彼にとって適切ではない。なぜなら、彼はノアについての聖書の記事を、物語あるいは神話とは考えておらず、それは文字どおり歴史的事実について述べられたものであると受けとめていたからである。

創世記9章によれば、ノアにはセム、ハム、ヤフェトという3人の息子がいた。ハムは酒に酔って寝ている父ノアの裸を見たために父の怒りをかい、ノアから「カナン(ハムの子孫)は呪われよ。奴隷の奴隷となり、兄たちに使えよ」という呪いの予言を与えられた。創世記9章19節には、「この三人がノアの息子で、全世界の人々は彼らから出て広がったのである」と書かれており、スティングフェローはこのハムを黒人の先祖と考えたのである。創世記9章のノアの3人の息子についての記述は、南アフリカのアパルトヘイト正当化の場合にも、たびたび用いられる聖書箇所である。<sup>16</sup>

次に、スティングフェローはアブラハムとモーセの場合を取り上げ、創世記および出エジプト記の記述を引くことによって、神は彼らが奴隷を所有したり売買したことによって、彼らを非難したり、彼らとの契約関係を破棄したりはしなかったことを示して、旧約聖書の時代には、奴隷制は神によって肯定されていたと主張する。

スティングフェローは新約聖書については、まずイエス・キリストを取りあげる。彼はイエスがモーセの律法を否定して、新しい律法を制定しようとしたのではなかったことに注目し、イエスは奴隷制を肯定していたモーセの律法を肯定したのであり、奴隷制に否定的ではなかったと主張する。さらにパウロについては、「おのおの主から与えられた分に応じ、それぞれ神に召されたときの身分のままで歩みなさい」という彼のことばを引用し、彼が奴隷制を否定していなかったことを証明しようとした。<sup>17</sup>

パウロの書簡以外の新約聖書からの奴隷制擁護の箇所として、スティングフェローは「ペテロの手紙 一」2章を取りあげる。すなわち、「召し使いたち、心からおそれ敬って主人に従いなさい」(18節) また「主のために、すべて人間が立てた制度に従いなさい」(13節) が、奴隷制を支持していると言うのである。

新約聖書のこれらの記事は、それが書かれた初代教会のキリスト者の信仰内容、とくに彼らの歴史意識を考慮して理解されねばならない。彼らは非常に切迫した終末意識を持っていたのであり、ま近に迫った終末に備えることが何よりも大切な、第一義

的なことがらであり、奴隷であるか、自由人であるかという区別は、ま近に迫った神の審きの前では二次的なことであると考えていたのであろう。しかし、このような新約聖書の解釈方法は、スティングフェローの時代にはまだ一般的ではなかった。スティングフェローは聖書を直解的に受けとめ、どの時代にも妥当する歴史的事実についての書として読もうとしたのである。

## 第2章 南アフリカの「見えざる国教」

### 1. 南アフリカの「見えざる国教」の特殊性

オランダ改革派教会はアフリカーナーの教会として、つねにアフリカーナーの運命と存続について、最大の関心を払ってきた。アフリカーナーにとって、オランダ改革派教会の存在とその神学は、単なる教派ではなく、「民族」(Volk)としての彼ら自身の存在を意味付ける根本的意味体系であった。これに名を与えるとすれば、もっとも適当な名は、アメリカの宗教社会学者ロバート・N・ベラ (Robert N. Bellah) が、啓蒙主義思想家ルソーの用語を借りて、国家としてのアメリカの宗教的次元を明らかにするための概念として用いた“civil religion”であろう。私はこれを意識して「見えざる国教」という訳語を採用している。<sup>18</sup>

1994年に制定された南アフリカ共和国憲法には「政教分離」が明記されており、キリスト教に特別の地位が与えられているわけではない。<sup>19</sup> しかし、かつての南アフリカの憲法は、南アフリカがキリスト教国家であることを明記し、キリスト教に優先権が与えられていた。<sup>20</sup> その意味で、アパルトヘイト時代における南アフリカの国教は、政教分離のもとでの「見えざる国教」ではなく、国教としてのキリスト教であったと言えるであろう。

しかし、アパルトヘイト時代に南アフリカがキリスト教国であったという場合、その内容が何であったのかは、それほど簡単ではない。アパルトヘイト時代の南アフリカの「見えざる国教」の特殊性は、「アフリカーナー」としてのアイデンティティと、「白人国家」としての南アフリカのアイデンティティとの関係が、複雑に交錯していた点にあると言えるだろう。

たとえば、1944年に、オランダ改革派教会の「社会悪に関する委員会」が出したアピールには以下のような内容が含まれている。

1. 白人文明と純粋なプロテスタント・キリスト教世界を救う。

...



3. 神の言葉に基礎を置く教会の諸原則と抵触する、白人と非白人の平等を信じている「服飾労働者組合」(Clothing Workers Union)と戦う。<sup>21</sup>

オランダ改革派教会のこのアピールには、アフリカーナーとしてのアイデンティティについての直接的な主張はなく、むしろ自らを「白人文明」、あるいはオランダ改革派教会に限定することなく、もっと広い意味での「プロテスタント・キリスト教世界」との関係において受けとめている。

このような南アフリカの「見えざる国教」の特殊性は、それまでの歴史的経験によって形作られてきたのである。新しい歴史的体験を経験することによって、「見えざる国教」が再解釈され、新しい要素が加えられ、変化してきた結果であった。<sup>22</sup> それでは、アパルトヘイト時代に至る南アフリカの「見えざる国教」の形成と変化はどのようなものであったのだろうか。

アフリカーナーの「見えざる国教」は、南アフリカにおけるライバルであったイギリスとの関係のなかで形成されてきた。とくに、1880年に始まった「第1次アングロ・ボーア戦争」がそのはじまりであった。<sup>23</sup>

南アフリカの歴史はつねに「三極構造」の中で展開してきた。三極とは、アフリカーナー、イギリスおよびイギリス系南アフリカ人、そして黒人である。南アフリカの三極構造を理解するために、ここで1961年の南アフリカ共和国成立までの南アフリカの歴史を概観してみたい。

## 2. 南アフリカの歴史の概観

南アフリカに最初に到達したヨーロッパ人は、ポルトガル人のバルトロメ・ディアス(Bartholomeu Dias)であった。1487年、彼は喜望峰に到達した。1498年には、バスコ・ダ・ガマ(Vasco da Gama)が喜望峰を経由してインドに到達する。これによって、ポルトガルはシルクロードのアラビア商人を経由することなく、アジアと交易を行う道を手に入れたのである。

1595年には、オランダも喜望峰経由のインド航路に進出し、1602年には2年前にすでに開設していたイギリスに続いて、東インド会社を開設した。オランダが日本の平戸に商館を開設したのは1609年のことである。1619年には、オランダ東インド会社はインドネシア・ジャワ島のバタビアに本拠地を置いた。

南アフリカはオランダ本国とバタビアの東インド会社を結ぶ航路の中間地点であり、補給基地として重要な位置を占めていた。1652年4月6日、東インド会社船団司令官のヤン・ファン・リーベック(Jan van Riebeeck)は、現在のケープタウンに上陸し、植民地の基を築くこととなった。

ヨーロッパにおいては、ピューリタン革命後、オランダの海運業に打撃を与えることになるクロムウェルの「航海法」をめぐって、オランダとイギリスは戦争状態に入るが、1652年から1674年の間の3回の戦争において、オランダはことごとく敗北し、海外植民地をイギリスに譲り渡すことになった。ニュー・アムステルダムがニューヨークになったのもこの時期である。

1795年には、イギリス艦隊が南アフリカに進出してケープ地方を占有し、143年間続いた、オランダの南アフリカ支配が終わりを告げることになった。1795年以降、短期間の例外的な期間があったとはいえ、1948年の国民党政権の成立までは、南アフリカは実質的にイギリスの支配のもとに置かれるのであり、そのなかでオランダ系南アフリカ人（アフリカーナー）は社会の中核から遠ざけられた存在として、歴史を歩むことになるのである。

1836年に始まった「グレート・トレック」（大移動）は、その後のアフリカーナーにとって、特別の出来事となり、アフリカーナーの「見えざる国教」にとっての「聖なる歴史」となっていった。

グレート・トレックの原因は、南アフリカの「三極構造」にあったと言えよう。フランス革命後の啓蒙思想の影響を受けて自由主義的傾向を強めたイギリスは、1807年には大英帝国内の奴隷制を禁止し、さらに1833年には奴隷解放令を發布した。

人種間の平等を標榜する自由主義的なイギリスは、農業を生業とするアフリカーナーにとって、自らの生存を危うくするものに他ならなかった。このようなイギリスの支配を潔しとしないアフリカーナーは、ケープ地域を捨てて、内陸部への大移動を行ったのである。これが「グレート・トレック」であった。グレート・トレックによってアフリカーナーは、トランスバルとオレンジ自由国という二つの共和国を建設し、1852年から1854年の間に、両国を独立国家としてイギリスに承認させた。しかし、1877年には、イギリスはトランスバルの行政の無秩序を理由に、トランスバル共和国を併合する。

南アフリカの「三極構造」との関係で言えば、1879年に変化が起こることになる。イギリス軍がズールー軍を撃破することにより、黒人による軍事的脅威が減少したために、翌年1880年、アフリカーナーはトランスバルの農民の納税拒否事件を契機として、イギリスに対して武装蜂起したのである。これが「第1次アングロ・ボーア戦争」である。戦争はボーア軍の勝利となり、トランスバル共和国は再び独立を獲得することとなった。

1886年にはトランスバルで、金鉱が発見され、イギリスの南アフリカ介入のための大きな要因となっていった。イギリスによるトランスバル再併合の推進者は、イギリス本国の植民地大臣であったジョセフ・チェンバレン（Joseph Chamberlain）と、

1890年にケープ植民地首相に就任するセシル・ローズ (Cecil John Rhodes) であった。

金鉱に続いてダイヤモンドの鉱脈が発見され、二重の「ゴールド・ラッシュ」は世界中から資本と移民を吸収し、ダイヤモンドの都市キンバリーと黄金の都市ジョハネスバーグが出現した。

ケープ植民地首相となったセシル・ローズは、ケープ、ナタール、オレンジ自由国、トランスバールの南アフリカ4地域によって「南アフリカ連邦」を形成し、大英帝国の一員とする政策を進めた。

イギリスによる植民地政策が強化されたこの時期に、トランスバール共和国の大統領を務めたのがポール・クルーガー (Paul Kruger、在任期間1881 - 1900年) であった。彼の対イギリス政策のなかから、アフリカーナーの「見えざる国教」が形成されてくるのである。

1895年、セシル・ローズはトランスバール共和国に侵攻するが失敗し、責任をとって首相を辞任する。しかし、植民地大臣チェンバレンによるトランスバール介入は執拗に続けられ、1899年、トランスバール共和国はイギリスに対して開戦し、「第2次アングロ・ボーア戦争」が戦われた。戦争は1902年まで続き、両軍ともに大きな犠牲を払った結果、イギリスの勝利で終わった。1902年、フェレニヒン講和会議によって、トランスバールとオレンジ自由国の両共和国はイギリスの植民地となった。

この戦争でのアフリカーナー側の戦死者3万4000人余りのうち、65%は16歳以下の子供たちであった。子供たちと女性の戦死者のほとんどは、イギリス側の強制収容所において死亡した人びとであった。この強制収容所は、近代戦争の歴史における最初の強制収容所であった。<sup>24</sup> 女性と子供たちの強制収容所での死は、これ以降、アフリカーナーのなかに抜き難い反イギリス感情を残す結果となった。

1910年には、南アフリカは南アフリカ連邦となって、イギリス連邦の一員となった。しかし、南アフリカ連邦時代の56年間、7人の首相のうち6人はアフリカーナーであり、この時期、アフリカーナーはイギリス連邦の一員として、自らを位置付けていたのであろう。

1948年の選挙で、マラン (D. F. Malan) に率いられた国民党は勝利をおさめ、単独政権を成立させた。アフリカーナー政権の成立である。

1961年、南アフリカはイギリス連邦から離脱し、南アフリカ共和国となった。

### 3. ポール・クルーガー

上記のようなイギリス帝国主義との対決の中から、アフリカーナーの「見えざる国教」が誕生した。それは民族の生存をかけた闘いに大義名分を与えるものであった。アフリカーナーの「見えざる国教」の生みの親、それがトランスバール共和国

の大統領であったポール・クルーガーであった。

クルーガーは厳格なカルヴァン主義的キリスト教を信仰していた。カルヴァン神学の中心は「神の主権」の強調である。クルーガーはカルヴァンの主著『キリスト教綱要』を手掛かりにして、神と旧約聖書の選民イスラエルとの間の、民族としての契約に注目した。クルーガーは個人的な救いのための神との契約と、神の主権のもとに、神の目的をこの世において実現するための、民族としての神との契約を区別し、これを「内的召命」と「外的召命」と呼んだ。<sup>25</sup> もちろん、クルーガーにとっての「民族」とはアフリカーナーに他ならない。

「外的契約」、すなわち民族としての神との契約を証明するもの、それがクルーガーにとっては、1838年の「血の川」の闘いの勝利であり、1880年の第1次アングロ・ボーア戦争での勝利であった。

イギリスの支配を逃れての「グレート・トレック」は、その地に住んでいたアフリカ黒人のズールー族にとっては、自分たちの土地への侵略以外の何もでもなかった。ディンガン率いるズールー族軍3000人とアフリカーナー軍500人は、1838年12月16日、ナタール北東部のコモ川流域で決定的な戦闘を行うこととなった。グレート・トレックのボーア軍は、乗ってきた牛車で円陣（ラガー）を組み、これを砦としてズールー軍を撃退したのである。<sup>26</sup>

クルーガーにとって「血の川」の闘いは、アフリカーナーの「見えざる国教」にとって、もっとも神聖な歴史的出来事として受けとめられた。彼はアフリカーナーが現在、イギリスにその存在を脅かされているのは、アフリカーナーが神との契約を誠実に遵守していないところに原因があると考えた。

クルーガーはアフリカーナーの苦難の現実のなかに、神との契約、神が与える試練、苦難ののちに備えられている神の祝福という、聖書的・神学的意味を見出していた。それは旧約聖書の選民イスラエルの歴史、あるいは、新約聖書のキリストの受難と復活との類比関係において、自らの歴史と運命を解釈する「類型論的自己理解」であると言えるだろう。

このようなアフリカーナーの「見えざる国教」への信仰は、クルーガー個人のもものではなかった。第2次アングロ・ボーア戦争の局面が不利になり、降伏するかどうかについての論争が行われた1902年5月15日から17日にかけての議論を見ると、当時のアフリカーナーが彼らの「見えざる国教」についての理解を、クルーガーと共有していたことがわかる。ボーア軍人の一人シャーク・ブルガー（Schalk Burger）はボーア軍の敗北について、「ボーア軍が敗退したのは、われわれの罪が原因だ。敗北はわれわれの傲慢さを神が打ち砕こうとされたからではないのか。必ずや、われわれがもう一度民族として存在することのできる日が来る」と語

っている。<sup>27</sup>

#### 4. アブラハム・カイパー

クルーガーと同時代のアフリカーナーたちにとっての「見えざる国教」の形成に、大きな影響を与えた人物。それがオランダの神学者で政治家でもあったアブラハム・カイパー (Abraham Kuyper, 1837 - 1920年) であった。

19世紀初頭のヨーロッパにおいては、ナポレオン戦争の後、啓蒙主義的合理主義が思想界・宗教界の主流となった。オランダも例外ではなかった。オランダの諸大学においては、正統的カルヴァン主義神学に代わって、啓蒙主義的神学が主流となっていた。

自由主義的あるいは理神論的傾向が強くなったオランダの改革派教会 (Hervormde Kerk) に批判的な人びとは、教団から離脱し、1834年に「分離キリスト教会」(Christelike Afscheide Gemeentes) を設立した。他のグループは1840年に「十字架のもとなる改革派教会」(Gereformeerde Kerken onder het Kruis) を設立し、さらに、この二つの教派に不満を持った人びとは、1869年に、「キリスト改革派教会」(Christelike Gereformeerde Kerk) を形成した。<sup>28</sup>

カイパーはカルヴァンにおいて、教会とこの世、聖性と世俗性という中世的二元論が克服されたと理解する。すなわち、カルヴァン神学の中心的概念である「神の主権」は、聖なる領域だけでなく、世俗的領域においても実現されるべき重要事であるからである。カイパーは国家について、国家は人間が作りだす混沌の恐怖をコントロールするための、「神の主権」を体現する組織であると考えた。<sup>29</sup> カイパーは個人の救いにとって必要な「個別の恵み」と「公共の恵み」を区別し、両者を強調したのであった。これは先に述べた、クルーガーの「内的召命」と「外的召命」に引き継がれていく。カイパーに代表される正統的カルヴァン神学の復興運動は、「ネオ・カルヴィニズム」という名で呼ばれている。<sup>30</sup>

カイパーは1880年に、アムステルダム自由大学を設立し、これが「ネオ・カルヴィニズム」のメッカとなっていた。南アフリカにとって、この年は第1次アングロ・ボーア戦争勃発の年にあたる。南アフリカのオランダ改革派教会の牧師となろうとしていた多くの若者は、オランダに留学し、アムステルダム自由大学のカイパーのもとで研究を行い、カイパーの「ネオ・カルヴィニズム」神学を南アフリカに持ち帰った。

南アフリカのネオ・カルヴィニストたちは、カイパーの「公共の恵み」を展開し、「領域」という概念を導入した。神の主権と神の統治は、異なった「領域」において独立して働くと考えたのである。その領域とは、個人、社会、文化などであり、社会のなかには、教会、国家、民族、家族が含まれ、文化のなかには、道徳、法、科学、

経済、言語などが含まれると考えた。すなわち、国家、民族、言語は、それぞれ神の主権を実現するために、神によって備えられた「領域」であり、尊重されるべきであるという主張である。それぞれの民族は、神から与えられた個別の使命を持っているという主張は、アフリカーナーにとっては、イギリス帝国主義の侵略から自らを守る神学的根拠となったのである。

カイパーの神学から導き出されてきた一連の政治的、文化的宗教運動は、南アフリカにおいては「キリスト教民族主義」(Christian Nationalism あるいは Christian National) と呼ばれ、世紀を越えて、アパルトヘイト時代にまで継承されていった。1994年にステレンボッシュで行われたヴァン・ロイ (Van Rooy) の演説はその典型というべきものであろう。

世界のすべての民族に神のアイデアが体现されている。個々の民族の役割は、そのアイデアのうえに民族を建て、それを完成させることだ。ここアフリカの南の端において個別の召命と運命を成就するために、神はアフリカーナー民族を独自の言語、独自の生活哲学、独自の歴史と伝統を持ったものとして創造されたのだ。<sup>31</sup>

## 5 . ブルーダーバント (アフリカーナー兄弟同盟)

20世紀初頭、アフリカーナーは全有権者の55%を占めていたが、イギリス系住民は南アフリカ経済において、農業以外のすべての分野で主導権を握り、アフリカーナーは貧困化していた。南アフリカ経済の中心をなしていた金およびダイヤモンドの鉱山においては、白人労働者から、賃金が15分の1であった黒人労働者への切り替えが進み、さらにアフリカーナーの貧困を助長していた。

1890年、都市に住む南アフリカ白人の人口は36%であった。しかし、これが1946年には75%に上昇している。とくに、1890年から1904年の間に、急激に変化したと言われている。アフリカーナーの都市への流入は彼らの貧困化が原因であった。

「ボーア」(農民)と呼ばれたアフリカーナーが、農村を離れて都市へと移入することは、農業と結びついた生活様式を放棄することであり、言語においてもアフリカーンスから英語へと変化することを意味していた。すなわち、アフリカーナーがイギリス化することへの憂慮を生じさせたのである。イギリス化とアフリカーナーの貧困の問題は「コインの両面」のようなものであり、アフリカーナーの経済状態を向上させることは、アフリカーナーとしてのアイデンティティを守ることと深く関係していた。<sup>32</sup>

1910年の南アフリカ連邦の設立以降、アフリカーナー内部において、イギリスと協調する道を選ぶのか、それとも、イギリスとの対立関係のなかで、アフリカーナ

ーとして独自の路線を選ぶのかという問題が、南アフリカの政治において、中心的な問題となっていた。この問題をめぐって、政党の成立、連合、分離独立などの政治的動きが現れてくるのであるが、この問題については本稿では取りあげない。

イギリス連邦の一員として、イギリス系南アフリカ人と協力しながら、アフリカーナーの地位の向上を図ろうとする「現実派」とは反対に、あくまでもアフリカーナー中心の国家の形成をめざす「理想派」は、とくに1930年代から、その動きを顕在化させていった。アメリカの大恐慌の影響で、白人貧困層の困窮度が深刻化したことが、アフリカーナー・ナショナリズムが顕在化した原因であった。

第2次アングロ・ボーア戦争の敗北を経験したアフリカーナーは、1910年代以降、アフリカーナー・ナショナリズムの高揚をめざすさまざまな文化運動の団体を形成したが、そのなかでもっとも影響力を持ったものが「アフリカーナー兄弟同盟」(Afrikaner Broederband)であった。ブルーダーバントは1918年に結成され、オランダ改革派教会、そして1913年に結党された国民党とともに、アフリカーナー・ナショナリズムの中核を形成する組織となっていた。

ブルーダーバントはアフリカーナーのなかのエリート集団であった。1944年の段階で、ブルーダーバントの構成員の3分の1は教師であり、10分の1は公務員であり、大学教授、牧師、弁護士などの知識人も含まれており、残りの大半は裕福な農民であった。<sup>33</sup> このように、ブルーダーバントの構成員の階層は、ピューリタン革命直前のピューリタン階層と酷似していた。

ブルーダーバントの活動にとっての主なるユニットは、各地の「細胞」であった。これは5人から10人で形成されており、少なくとも1カ月に1度は集まって、アフリカーナーが直面している問題の改善方法について話し合った。その問題とは、アフリカーナーの貧困、アフリカーンス語教育、アフリカーナーのイギリス化、人種の分離等であった。

国民党のエリートの多くはブルーダーバントのメンバーだった。ブルーダーバントの急進的な理論家たちは、イギリスとの共存を模索しようとしていた国民党の現実的な政策に対して焦りを感じ、不寛容になっていった。

## 6. オックス・トレック (牛車の行進)

アフリカーナー・ナショナリズムを高揚させる決定的な出来事が、「血の川」での神との契約の100周年にあたる1938年に行われた。

ブルーダーバントの創設者であったヘニング・クロッパー (Henning Klopper) は、彼が創設したアフリカーナー文化運動団体の一つ、「アフリカーンス語と文化を守るための南アフリカ鉄道港湾労働組合」の1937年の総会で、「グレート・トレック」の足跡をたどるために、当時と同じように、牛車による行進 (Ossewatrek, Ox Wagon

Trek) を行うことを提案した。

1938年8月8日、ケープタウンのリーベックの銅像のもとから、最初の2台のワゴンが出発した。出発に際して、ヘニング・クロッパーは「この厳肅なときに、約3世紀前に、リーベックが上陸したこの地点において行進を始めることは、まことにふさわしいことである。… 神の栄光が讃えられるべきである。… 私たちはこれらのワゴンをわれらの民族とわれらの神に捧げる」と演説を行った。<sup>34</sup>

「グレート・トレック」当時と同じように、男たちは髭をたくわえ、女たちは当時の服装を身にまとして行進を続けた。赤ん坊はワゴンのそばで、洗礼を授けられた。若いカップルは、ワゴンの前の草原で、当時の正装で結婚式をあげた。

夜には数百人、数千人の人びとがワゴンの回りに集まり、キャンプファイヤーを焚いて、伝統的なフォークソングと古いオランダの詩編を歌い、「グレート・トレック」の先駆者であった「フォートレッカー」の様子がパントマイムで演じられ、アフリカーナーの「見えざる国教」のテーマから取られた説教に耳を傾けた。ワゴンの訪問によって、アフリカーナーにとっての「聖なる土地」は再び聖化された。

9台のワゴンが目的地のプレトリアに到着したとき、3000人の人びとが手に手に松明(たいまつ)を持って迎え、それらの松明は、ワゴンで運ばれてきた松明と一つにされた。

「オックス・トレック」によって、アフリカーナーたちは彼らの「聖なる歴史」を実感し、彼らの「見えざる国教」によって、アフリカーナーのアイデンティティを再確認したのである。

### 第3章 二重のアイデンティティ -- 「アフリカーナーの文化」が「白人の文明」か

のちに1948年の総選挙で、国民党党首として勝利をおさめたマラン(D. F. Malan)は、「オックス・トレック」の5年後の1943年に、イギリスとの協調路線をとっていた当時の国民党から離脱し、「純正国民党」を形成した。

マランは1938年の「オックス・トレック」について、つぎのように語っている。

「民族としてのアフリカーナー」(Afrikanerdom) が現れてきた「血の川」での黒人に対する戦いにおいて、南アフリカの白人文明の運命は明らかになった。アフリカーナー民族は今日、新しいフロンティアへのトレックの途上にある。それは都市というフロンティアであり、都市こそは「新しい血の川」なのだ。そこにおいて、アフリカーナー同朋は労働市場という新しい戦場において日々崩壊の危機に直面している。…



白人という人種はいまなお存在している。新しい民族と独自の言語が存在している。これは拒絶することのできない民族としての運命である。…武器による戦いは過ぎ去った…あなた方にとっての「血の河」はここにはない。それは都市にある。…

アフリカーナーは再びトレックの状態にある。…それはかつてのような文明の中心から離れるというトレックではなく、100年後の今日は、田園から都市へという反対のトレックである。…黒人と白人が戦う「新しい血の川」は労働市場である。(下線筆者)<sup>35</sup>

このマランの言葉は、アフリカーナーの複雑なアイデンティティ理解を表している。マランは明らかに、民族としてのアフリカーナーと白人文明を同一視している。それでは、白人のもう一方の構成員であったイギリス系南アフリカ人について、マランはどのように考えていたのだろうか。南アフリカにおける「白人文明」の担い手は、アフリカーナーなのか、それともアフリカーナーとイギリス系南アフリカ人の両者であったのか。

アフリカーナー中心の排他的アイデンティティを主張する「理想派」の立場を最初に表現したのは、1877年に、『我が国民の言語で書かれた我が国土の歴史』を著したオランダ改革派教会の牧師、S. J. デュ・トイト (S. J. du Toit) であったと言われている。<sup>36</sup>

「理想派」の代表の一人でありながら、デュ・トイトはこの著作の中で、「アフリカーナーは一つの祖国を持った一つの民族であり、南アフリカを支配し、異教徒の住民を文明化するよう、神によって運命づけられていた」と語っている。(下線筆者)<sup>37</sup> この「文明」とは、アフリカーナーの文明というよりも、「白人文明」あるいは「ヨーロッパ文明」を意味していたと理解すべきであろう。

南アフリカの「三極構造」のなかで、アフリカーナーは複雑なアイデンティティ理解を形成していった。黒人を「(白人)文明化する」こと。これを神が自分たちに与えた運命であると理解しながら、同時に、南アフリカにおける白人文明のもう一方の担い手であるイギリス系南アフリカ人は、自分たちを抑圧する存在であるという現実と直面しなければならなかった。

19世紀後半、ビクトリア朝時代のイギリス支配階級の人びとは、「社会進化思想」(Social Darwinism)の信奉者であった。文明の社会進化の「フォア・ランナー」は、アングロサクソン(イギリス)であるという政治神話である。それでは、マランやデュ・トイトが主張した「(白人)文明」と「アングロサクソン文明」の関係について、アフリカーナーはどのように考えたのだろうか。

ヘルツォーク (J. B. M. Hertzog) は1924年から1939年の間に、4回、南アフリカ連邦の首相を務めた。彼は心情的には「理想派」であったが、イギリス連邦の一員とし

て南アフリカが生き残るために、「現実派」的対応をとらざるを得なかった。彼は南アフリカ（彼にとっては白人南アフリカ）のなかに、二つの民族的伝統があることを認めようとした。

南アフリカのコミュニティ・ライフには二つの流れがある。それは英語を話す流れとオランダ語を話す流れである。それぞれは独自の言語、生活様式、偉人、英雄的行為、高貴な性格を持っている。それは歴史が作り上げた結果である。...しかし、より高いところで、一つのコミュニティ・ライフを発展させることは、われわれの義務である。それぞれの言語を保持しつつ、精神と感情において一つの民族とならねばならない。<sup>38</sup>

南アフリカでは、「ヨーロッパ人」と文明は同義語である。白人が消滅することは、文明が消滅することに他ならない。<sup>39</sup>

1914年の国民党の綱領は、このヘルツォークの「現実派」の立場を反映している。

われわれの繁栄は、イギリス連邦として、ヨーロッパ人の統合のうえに基礎を置いている。われわれは一つの民族でなければならない。<sup>40</sup>

これに対して「理想派」は、アフリカーナーの「現実派」やイギリス系南アフリカ人とともに、黒人の勢力拡大に対する恐怖心は共有しながら、イギリスの帝国主義と君主制を批判し、「共和制」の南アフリカを主張することによって、イギリスおよびイギリス系南アフリカ人とは対立するナショナル・アイデンティティを形成しようとした。

第1次、第2次アングロ・ボーア戦争期、クルーガーはイギリス帝国主義に対抗するために、トランスバールとオレンジ自由国という二つの共和国の存続を主張し、そのために戦った。しかし、第1次世界大戦後のベルサイユ講和会議において、「民族自決」の原則が確認されたことによって、アフリカーナーたちは、南アフリカ北部の二共和国の存続ではなく、南アフリカ全体を共和制国家とするという主張へと方向転換を行っていった。

1958年に首相に就任したフェルワルトは、強固なアフリカーナー・ナショナリズムの支持者であり、共和主義者であった。彼は首相としての最初の議会演説で次のように述べている。

私たちの戦いの基礎にあるのは、帝国主義に対する民族主義であり、...専制政治に反

対するものとしての共和国である。<sup>41</sup>

アフリカーナーとイギリス系南アフリカ人は、南アフリカにおける経済的・政治的支配権をめぐる対立したが、マジョリティである黒人の勢力拡大に対する恐怖心を共有し、決してこの点で対立することはなかった。

第2次世界大戦後の冷戦の時代、南アフリカは反共産主義の立場を明確にしていた。とくに、1960年代以降、ソ連の支援によって、アフリカのヨーロッパ植民地において民族解放運動が進展していくとともに、南アフリカは、「黒人解放運動 = 共産主義、無神論的物質主義」、「白人文明 = 反共産主義、キリスト教」という図式的な理解を明確にし、自らを位置づけていった。1966年から1968年にかけて、イギリスは南アフリカに隣接する3つの地域（レソト、ボツワナ、スワジランド）を黒人に権力委譲した。その結果、ローデシアとナミビアを除いて、南アフリカの隣国はヨーロッパの支配から独立して、黒人国家となった。

このような状況の中で、アフリカーナーの「理想派」は黒人と対抗するために、イギリス系南アフリカ人との連携を強めていかざるを得なかったのである。アフリカーナー・ナショナリストであったフェルウールトが1958年の「血の川」での契約の記念日（The Day of Covenant）に行った次の演説は、この間の事情を明白に物語っている。

私たちはもはやトレックの状態にはないが、古（いにしえ）のフォートレッカーと同様に、今なお戦い続けている。...この戦いは、アフリカの最南端において白人が存続し、この地において宣教せよと言われた宗教が存続するための戦いである。...

なぜ300年前に、白人はこのアフリカ最南端の地に導かれたのか。...なぜ少数者が人数を増し、南アフリカ全体に拡がることのできたのか。...私はそれには目的があり、それは私たちがこの地で、西洋文明とキリスト教的宗教（Christian religion）のための礎となることであつたと信じる。（下線筆者）<sup>42</sup>

## おわりに

本稿では、南アフリカのアパルトヘイトの正当化に宗教的根拠を与えた、オランダ改革派教会と南アフリカの「見えざる国教」についての分析を行った。

今回は紙幅の関係で、アパルトヘイトが廃止され、多文化主義による国家建設が目指されている現在、オランダ改革派教会がアパルトヘイトについて、どのような総括

を行ってきているのかについて扱うことができなかった。また、なぜ南アフリカの「見えざる国教」が自己肯定的傾向の強いものとなり、自己超越的、自己批判的要素を欠いたものとなったのかについての分析を行うことができなかった。この点については、アメリカ合衆国の「見えざる国教」との比較において、別稿において扱えればと願っている。

注

- 1 伊高浩昭『南アフリカの内側 - 崩れゆくアパルトヘイト』、サイマル出版会、1985年、31-32頁。
- 2 1996年の国勢調査によれば、人種の分類は、「アフリカ人/黒人」(African/Black)、「カラード(混血)」(Colored)、「インド人/アジア人」(Indian/Asian)、「白人」(White)となっている。南アフリカの場合、白人も自らを「アフリカ人」と主張するので、本稿においては、「黒人」、「白人」という表記によって表す。
- 3 山本 浩『真実と和解 - ネルソン・マンデラ最後の闘い』、NHK出版、1999年、204-205頁。
- 4 J.W.Hofmeyer & Gerald J.Pillay(ed.), *A History of Christianity in South Africa*, Vol.1(Vol.2 is not published), Haum Tertiary, 1994, p.311. 2001年8月の南アフリカ大使館からのインターネット・ホームページの情報では、「人口の80%はキリスト教徒」とある。( <http://www.rsatk.com/information/jinfor.htm> ) 統計のとり方によって、大きな差異が出ているようだ。
- 5 林 光一『イギリス帝国主義とアフリカーナー・ナショナリズム 一八六七～一九四八』、創成社、1995年。「第四章 オランダの反革命・信仰復興運動とアフリカーナーのナショナリズム高揚運動 - 新・カルヴァン主義者の役割を中心として - 」は数少ない研究の一つである。
- 6 The General Synodal Commission of the Dutch Reformed Church, English Extract from the Afrikaans Document: *The Story of the Dutch Reformed Church's Journey with Apartheid 1960-1994, A Testimony and Confession*, 1997, pp.6-7.
- 7 *Ibid.*, p.35.
- 8 *Ibid.*, p.36.
- 9 Leonard Thompson, *The Political Mythology of Apartheid*, Yale University Press, 1985, pp.106-107.
- 10 *Ibid.*, p.4.
- 11 Hansard, May 18, 1959. See T.Dunbar Moodie, *Rise of Afrikanerdom: Power, Apartheid and Afrikaner Civil Religion*, University of California Press, 1975, p.266.
- 12 T.N.Hanekom, "Eintli'n sendingkongres", *Die Kerkbode*, 19 April, 1950. See General Synodal Commission, *Journey with Apartheid*, p.8.

- 13 See General Synodal Commission, *Journey with Apartheid*, p. 5.
- 14 森 孝一 『『アメリカ学派』の人種研究と奴隷制論争:19世紀前半における科学と宗教』井門富二夫編 『アメリカの宗教伝統と文化・アメリカの宗教・第一巻』、大明堂、1992年参照。
- 15 Thornton Stingfellow, “The Bible Argument: or, Slavery in the Light of Divine Revelations”, in : E.N.Elliott(ed.), *Cotton Is King and Pro-slavery Arguments*, Pritchard, Abbot & Loomes, 1860, pp.461-546.
- 16 See J.A.Loubser, *A Critical Review of Racial Theology in South Africa: The Apartheid Bible*, The Edwin Mellen Press, 1987, p.7.
- 17 コリントの信徒への手紙 - 7章 17節。
- 18 森 孝一 『宗教からよむ「アメリカ」』、講談社選書メチエ、1996年参照。
- 19 佐藤 誠 (編著) 『南アフリカの政治経済学 - ポスト・マンデラとグローバリゼーション』、明石書店、1998年、42-43頁。
- 20 『南アフリカ連邦憲法』の第1条には、「連邦の国民は、全能の神の至高性と先導とを承認する」と規定されている。衆議院法制局他 『南アフリカ連邦憲法』(和訳各国憲法集 続24)、1957年、6頁参照。
- 21 *Die Volksblad*, March 30, 1944. See Moodie, *Rise of Afrikanerdom*, p.253.
- 22 アメリカ合衆国における「見えざる国教」の変化については、ロバート・N・ベラー 『破られた契約 - アメリカ宗教思想の伝統と試練』、未来社、1983年参照。
- 23 南アフリカにおけるアフリカーナーとイギリスとの間の植民地戦争。「ボーア」とは本来「農民」を意味するオランダ語であったが、農民が中心であったオランダ系入植者を表す言葉となった。
- 24 Loubser, *Critical Review of Racial Theology*, p.20.
- 25 See Moodie, *Rise of Afrikanerdom*, p.26.
- 26 12月16日はアパルトヘイト時代、「契約の日」として、アフリカーナーにとってもっとも重要な記念日となった。
- 27 J.D.Kestell and D.E.van Velden, *The Peace Negotiations between the Governments of Great Britain and the South African Republic and the Orange Free State*, de Bussy, 1912, p.77. See Moodie, *Rise of Afrikanerdom*, p.35.
- 28 Moodie, *Rise of Africanerdom*, p.52.
- 29 アブラハム・カイパー 『カルヴィニズム』、聖山社、1989年、131-134頁。
- 30 Moodie, *Rise of Afrikanerdom*, pp.54-55.
- 31 *Die Burger*, October 11, 1944. See Moodie, *Rise of Afrikanerdom*, p.110.
- 32 Moodie, *Rise of Afrikanerdom*, p.70.
- 33 *Ibid.*, p.100.
- 34 *Ibid.*, p.179.
- 35 See *Ibid.*, p.199.
- 36 Thompson, *Political Mythology of Apartheid*, p.30.

- 37 レナード・トンブソン 『南アフリカの歴史』、明石書店、246 頁参照。
- 38 C.M.Van den Heerver, *General J.B.M.Hertzog*, Afrikaanse Pers, 1944, p.75. See Moodie, *Rise of Afrikanerdom*, p.75.
- 39 Moodie, *Rise of Afrikanerdom*, p.261.
- 40 *Ibid.*, p.78.
- 41 *Ibid.*, p.100., p.283.
- 42 A.N.Pelzer, *Verwoerd Speaks*, Afrikaanse Pers, 1966, pp. 209-211. See Moodie, *Rise of Afrikanerdom*, p.284.